



# 東北大学史料館 だより

No.8  
2008 Mar.

## TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



### Index

- 2 東京商科大学経理事務講習所と文経会  
高等教育開発推進センター教授  
羽田 貴史

---

- 6 資料の公開について

---

- 8 お知らせ

---

上：東北帝国大学理科大学  
(北側；赤レンガ)  
下：同 (南側；木造赤塗り)  
石井出張所  
写真帖

### 完成間近の大学建築

明治40年(1907)6月22日、勅令により、仙台の理科大学と札幌の農科大学から成る「東北帝国大学」が設置された。札幌の農科大学(後の北海道帝国大学農学部)が、札幌農学校としての開校以来すでに30年以上の歴史を持っていたのに対し、仙台の理科大学(後の理学部)はゼロからの出発であり、最終的に大学敷地が確保され建物が建築されるまで、4年間を待たなければならなかった。

当時の乏しい予算では、建物と設備品までが精一杯だったため、土地は国有地である第二高等学校敷地の一画を使用することになった(現在の片平キャンパス多元科学研究所・科学計測研究棟等の付近)。当時は地元で適当な業者がなかったのか、東京大学、学習院大学など文部省関係の仕事を多く手がけていた、東京の「土木建築請負業者石井権蔵方」が担当することになった(大正2年以降「石井組」と称したため、以下その名称を使う)。石井組では仙台市伊勢屋横丁1番地に仙台北出張所を開設し、浅野真夫(後の市議会議員)が中心となって建築作業を進めた。当時の石井組の様子は、河合宇三郎著『問わず語り』(私家版、1986年刊)に関連する記述がある。

右下の写真は最近東北大学百年史編纂室が入手した、当時の様子を撮影した写真帖(史料館へ移管)。そこには建設中や完成直後の建物がいくつも写されており、創設期の大学の雰囲気を現在に伝えている。



# 東京商科大学経理事務講習所と文経会

東北大学高等教育開発推進センター教授

羽田 貴史



## 1. 東京商科大学経理事務講習所について

経理事務講習所という名前を知っている方は、大学について、相当の「通」である。今、Staff Development（職員の職能開発）の必要性が説かれているが、国立大学の事務職員は職種を限らず一括採用が基本であり、特定の専門職として発展していない。最近、桜美林大学、東京大学で大学事務職員を主な対象にした大学院が設置され、講義を行っているが、アメリカのように、学生担当職員などそれぞれの職種に対応した専門プログラムが大学院で多数開かれているには至っていない。

経理事務講習所は、大正13年に文部省が設置した会計官吏養成所であり、私の知る限り、文部省関係職員を専門的に養成した組織としては、大正10年に東京美術学校内に設けられた図書館職員教習所（図書館情報大学のルーツとの位置づけ）とこれだけである。図書館職員教習所が断絶しながらも学校として存続し、記録に残るが、経理講習所は大正13年4月に設置され、7年間に170名の生徒を卒業させた後、昭和6年3月に廃止され、歴史の中に埋もれてしまった。現在ではウェブ検索ではこの名前は見つからない。わずかに、『一橋大学百年史』に「商大経理事務講習所開設」として1ページほどの記述があるだけである。

## 2. 経理事務講習所と私

筆者が1970年代の末に福島大学に就職して間もないころ、東京大学百年史の財政部分を執筆依頼され、引き受けたものの、全般的な制度についての知識はあったが、個別大学の財政制度に関する先行研究がほとんどないことに苦慮した。戦前に東京帝国大学の会計関係部署に勤めていた職員に聞き取りをすることを思いつき、紹介者もなく送った手紙に応じてくれたのが原武福治氏（元医科研事務長）であり、氏を介して経理講習所のことを知った（氏は5回生、昭和4年修了）。それを縁に、砂子茂氏（2回生、大正15年修了、新制大学発足時の文部省予算担当）、浅野清重氏（5回生、元京都大学事務局長）、上山定治氏（6回生、昭和5年修了、元一橋大学事務局長）に聞き取りをし、講師の一人であった岸田源壽氏（大正12年に京都帝国大学書記から震災間もない文部省に移動し、予算決算掛調査班担当主任を勤め、横田春吉予算決算掛長のもとで経理講習所の立案・準備を担い、実務講義も担当）にもインタビューすることができた。インタビューでは教えられたことも多かったが、私が実感したのは、この人たちの大学というものに対する尊敬と愛着、そして仕事への意識であり、すでに退職されてていたとはいえ、官僚臭さよりも大学の自由の雰囲気が漂っていた。大学史の中で職員について触れられることは少ないが、戦後の名古屋大学発展に力をつくした須貝義弘事務局長（自伝として『敗戦の痕』がある）など、伝えられる名事務局長は確かにいたし、大学を支えてきた人材なのである。

## 3. 経理事務講習所の発足と生徒募集

経理事務講習所の発足は、大正8年に成立した高等教育拡張計画によって学校会計経理事務員の確保が必要になったため、大正13年の春には横田掛長が構想し、4月開所を目指して岸田主任が具体案を策定した。財源は、官立大学予算の本省留置分であり、東京商科大学に付設し、「東京商科大学経理事務講習所」とされた（岸田源壽「経講の創設と開所前後」『文経会の50年』昭和54年10月）。もっともそれは組織上のことであり、学科も実習もすべて震災後、神田橋より大手町よりのバラック建て文部省構内にあった。講習所は「経理事務ニ従事スル者ニ須要ナル智識技能ヲ授クル所トス」（東京商科大学経理事務講習所規程第1条）とされ、期間は1年（第3条）、入学資格は30歳以下で文官任用令第6条の条件を備えた者又はこれと同等以上の学力を有する者と認

める者で、中学校卒業程度であった（第4条）。

特典としては授業料はなく、学費補助として月30円が支出された。規定では35円以内となっていたが、『文経会の五十年』の寄稿では、みな30円となっており、多少ケチられたらしい。その代り、生徒は修了後、2年間指定の職務に従事する義務があり（第6条）、これに反したり、品行や成績不良の場合には退所し、学資をすべて一時に変換することとされていた（第7条）。

生徒は、一般から募集したほか、学校や官庁からの委託生も引き受けていた。発足にあたり、大正13年3月28日付で文部大臣官房会計課長窪田治輔から東京帝国大学総長古在由直あてに経理事務講習所の附設と、「直轄諸学校在勤者ニシテ入所希望ノ者ニテ特ニ委託生トシテ入所許可セラルルニ付」推薦を求めている（東京大学『文部省往復 大正13年（乙）』）。内容から見て、すべての直轄学校に送付したものであろう。東京帝国大学から希望者はなかったが、北海道帝国大学（2名）、名古屋高等商業学校、鹿児島高等農林学校、第三高等学校、東京聾啞学校から計5名が委託生となった。廃校まで委託生は48人であり（表1）、官立学校以外にも、中央气象台、文部省予算掛のほか、外務省（10人）からも派遣されている。

講習所開設の時期は、金融恐慌に引き続く世界恐慌が日本経済を襲い、不景気と就職難の時代である。明治期にはエリートであった中学卒業者は半端な存在となり、専門学校や高等学校・大学を目指そうにも体力・知力と財力がなければ難しかった。この時期に、学資を支給されて教育を受けられる講習所は魅力的であった。受験の動機にこれをあげる者も多く、特に受験雑誌『受験と学生』に、2回生唐鎌角次郎氏が、「母校礼讃」の欄で紹介し、中学卒業だけでは任官できないのが普通だが、講習所修了者は文部属ないし大学書記となり、将来高等官になる道もあり、さらに義務期間を終えれば、大学進学も可能と宣伝したことも、受験者に大きなインパクトを与えた。いふならば、単に大学経理職員志向だけでなく、ステップアップのために講習所を受験した生徒も多かったらしい。また、受験者の学歴は多様で、大学予科・専門学校中退、専門学校検定、大学卒業者も含まれていた。

競争は激しく、「受験場はどこだったか忘れたが、バラックの広い教室だったように覚えている。受験生を見て驚いた。えらい大勢の人々そして角帽、長髪の紳士然とした人達、これでじゃ田舎のポット出は歯が立たないぞと恐れをなしたが」（3回生、森賀進、『文経会の50年』p.56）、「志願者は十数倍」（4回生渡辺尚道、前掲書、p.71）、「約20倍の競争に恐れを抱きながら受験してみた」（5回生小山康三、前掲書、p.95）、「募集人員が十数名では到底選ばれることはないと思ひ」（7回生、田中喜彦、前掲書、p.113）、といった思いでの受験であった。

#### 4. カリキュラムと講師陣

3学期制で毎日8時から10時、午後3時から5時までが学科、10時から午後2時までが事務実習、毎週2日は全部学科で週48時間の授業時数、事務実習は文部省会計課各掛に配置された。総時間数は2,112時間で44週間、単位に換算すると約60単位に相当し、なんともハードな学習である。

講師陣は東京商科大学教官と文部省書記官らで（表2）、東京商科大学教官には、財政学の井藤助教授、経済哲学の杉村助教授らも名を連ねている。

行政官としては、のちの文部次官菊池豊三郎、名予算掛長として令名の高い横田春吉氏、東京工業大学の名事務官として知られた石井茂助氏、『国立学校財政制度史考』の著者佐藤憲三氏、『講座白書』の著者須貝義弘氏ら実務家として名をなした人々の名前も見える。また、会計法を担当した大蔵書記官関原忠三氏は、『文経会雑誌』第11号（昭和7年5月）、第12号（昭和7年10月）に「改訂学校会計法小釈上」「下」を掲載している。ただし、一橋大学に保管されていた講師名簿は、予定者のものであり、実際に講義したとは限らなかった（『文

表1 経理事務講習所生徒数

回数	入学年月	一般学生	委託生	計
1	大正13年5月	24	6	30
2	大正14年4月	20	9	29
3	大正15年4月	22	4	26
4	昭和2年4月	17	7	24
5	昭和3年4月	15	9	24
6	昭和4年4月	14	8	22
7	昭和5年4月	10	5	15
		122	48	170

（『文経会の50年』p.133より）

経会の50年』あれこれ』『文経会会報』No.3,1979.12.15)。

中でも大きな影響を及ぼしたのは、在学中に高等文官試験に合格し、昭和2年3月、東京帝国大学法学部を卒業して文部省に入職した有光次郎氏である。有光は官房会計課に配置され、その9月から講習所での講義を担当することになった。以後、講習所の閉所まで講師を務め、世代が近かったためもあり、講習所卒業生とは終生厚い親交があった。

ハードな毎日で、慣れない珠算に苦しむ生徒たちではあったが、官費の修学旅行もあった。2回生は東北方面の旅行であり、東北帝国大学・金属材料研究所、盛岡高等農林学校の見学、浅虫の東北帝国大学臨界実験所を見学し、浅虫温泉に泊った。よほど印象に残ったのであろう。『文経会の50年』に寄稿した2回生5人のうち3人は、この修学旅行のことを書いている。

## 5. 修了と配属

生徒たちは講習所を修了するとそれぞれの職場へ配置され、委託生は職場へ戻った。第1回生の大関正夫氏は雇金45円で予算掛に配属され(これで見ると、30円の学資金は生徒にしてはリッチである)、そのまま講習所の事務を執り、試験監督をしたりした。「志田老先生が経講を当代寺小屋教育だと喜ばれ」(岸田源壽、『文経会の50年』、p.8) たような雰囲気は、教える側と教えられる側の職場を通した一体感によるところが大きかったろう。

## 6. 文経会と『文経会雑誌』

特筆すべきは文経会と、その会誌として大正15年から発行された『文経会雑誌』である。文経会は、通常会員(経理事務講習所修了者)、特別会員(経理事務講習所職員及び職員経験者)からなり、会員の親睦向上を図ることを目的としていた。会長は経理事務講習所長で初代は文部省会計課長西山政猪氏、会費は年2円で、年2回会報を出すことを主な事業にしており、その会報が『文経会雑誌』であり、大正15年12月の創刊号から昭和10年7月まで16冊刊行された。内容は、論説、研究、説苑、文芸、雑録からなり、東京商科大学の紀要の構成に似ている。ほほえましい小説やエッセイもあるが、この時期の官立学校財政の実態や課題を物語る論文も

表2 経理事務講習所学科目・時間数・講師(大正13年度)

学科目	毎週授業時数			総授業時数	担当講師
	第1学期	第2学期	第3学期		
法学通論	2	2		64	文部書記官沢田源一
憲法		2	2	56	文部書記官菊池豊三郎
行政法		2	2	56	文部書記官赤間信義
民法(総則)	4			64	東京商科大学教授田中誠二
民法(物権)		4		64	東京商科大学教授孫田秀春
民法(債権)			6	72	東京商科大学教授岩田新
商法大意			4	48	東京商科大学教授志田鉦太郎
経済学	2	2		64	東京商科大学助手川村豊郎
財政学		2	2	56	東京商科大学教授渡辺大輔
統計学			2	24	東京商科大学教授藤本幸太郎
会計法	6	2		128	大蔵書記官関原忠三
英語	2	2	2	88	文部省嘱託根本通美
ドイツ語	2	2		64	東京商科大学教授金子弘
フランス語		2	2	56	文部省嘱託根本通美
作文	2	2	2	88	文部省図書監修官佐野保太郎
簿記		2	2	56	東京商科大学専門部助教授村瀬玄
珠算(応用数学を含む)	4	2	2	120	東京商科大学専門部助教授村林専之助
実務講義	8	4	4	240	文部事務官高田休廣ほか多数
会計事務実習	16	16	16	704	
計	48	48	48	2,112	

(『文経会の50年』 pp.127～128及び『文部省往復大正13年(乙)』)

少なくない。不二良一「時代思潮二伴ハザル雇員ノ日給制度」(『文経会雑誌』第2号、昭和2年10月)、山田正雄「雇人の待遇に就いて」(『文経会雑誌』第7号、昭和5年10月)、山田正雄「直轄学校調査に就いて」(『文経会雑誌』第9号、昭和6年8月)などは、国立学校の大学運営の歴史を知る上で貴重な文献である。

また村瀬玄「予算会計の複式記帳法私案」(『文経会雑誌』第16号、昭和10年7月)は、病院会計における複式会計導入の提案であり、今なら国立大学法人の会計基準につながる発想である。

## 7. 東北帝国大学と文経会

実は東北大学と文経会とは少なからぬ縁がある。文経会支部は北海道と仙台だけだったが、昭和7年3月に発足した仙台支部は、通常会員7名、名誉会員1名、賛助会員20名、計28名の大所帯でスタートし、一時は50名は越えたい。東北帝国大学の当時の職員数はさだかではないが、一大勢力であったことは確かである。19日の発会式には本多光太郎総長、本多智蔵会計課長、山田正雄文経会庶務係が祝辞を述べている。仙台支部は東北帝国大学教官の講話を中心とした座談会、支部報の発行、講習会のほか、海の家ハイキングなどの親睦事業も行われた。佐藤丑次郎教授(憲法)、林鶴一教授(数学)も講師になっている。これらはまったく文経会会員、職員の自主的な活動として行われたのである。この頃の東北帝国大学の発展と成長は、彼らの活動やそれによって醸成・高揚した意識と無縁ではないであろう。



昭和7年4月30日 星加翹夫君東北帝大入学歓送の宴  
於神田多賀羅亭

\*大学進学者は4名、なぜか全員東北帝国大学であった。  
その1人星加氏の歓送会

## 8. 多彩な修了生のキャリア

生徒の講習所受験動機は、高等教育機関への進学という夢を何とか実現したいというところにもあった。従って、大学事務職員としてキャリアを積んで力を発揮した者もいたが、大学職員の枠をはみ出し、異彩を放つキャリアを持つ者もいた。前者で最高のステータスは事務局長であろう。事務局長まで達した者は、浅野・上山両氏のほかに、守屋数男氏(2回生、静岡大学)、荒木五六氏(4回生、電気通信大学、新潟大学)、名取嘉四郎氏(5回生、長崎大学)、藤野正氏(5回生、東京医科歯科大学)、青木久衛氏(6回生、九州芸術工科大学)、針貝信吉氏(6回生、新潟大学、東京芸術大学)、有田文雄氏(7回生、徳島大学)、中原二良氏(7回生、小樽商科大学)、田中喜彦氏(7回生、大阪大学)、柴田大三氏(7回生、室蘭工業大学)と12人を数える。委託生を除く一般学生の10%強は低い数字ではない。

後者の代表は、山田正雄氏(1回生)である。高等文官試験に合格し、退官したのち司法試験に合格、さらに茨城県布川町長となり、利根川工事をめぐり国と戦い、知事選にも立候補する波瀾万丈の人生を送った。

また、高等文官試験(司法科)に合格して裁判官となり、財田川事件を担当したのち、退官後弁護士として冤罪を晴らすのに尽力した矢野伊吉氏は講習所の7回生である。藤田藤雄創価大学経営学部教授(3回生)、病院管理学を開拓し、国際病院連盟の日本初の会員となった山本昌之氏(3回生)、公認会計士となった山根健二氏(3回生)、国立市議会議長柳田公太郎氏(6回生)など、彼らの人生に講習所は意図せざる機会を与えたのである。

(付記) 本稿は、20年以上前に書くつもりであったが、多忙さでつい機会を失っていた。同窓会に出席させていただいたことがあったが、新会員のいない同窓会の物悲しさを感じた。最も若い修了者でも1910年代生まれであり、すでにほとんどが物故され、経理事務講習所と文経会について知るものはいなくなっていくであろう。遅くなり、ささやかな文章ではあるが、歴史を書きとめる責任を果たせ、安堵している。機会を与えていただいた東北大学史料館に感謝したい。

## 資料の公開について

史料館では、公開準備が完了した資料の目録を順次ホームページ上で公開しています。平成19年（2007）9月から20年3月までの間に目録を公開する主な文書は、以下の通りです。

資料目録は当館閲覧室に備えつけてある他、当館ホームページ（<http://www.archives.tohoku.ac.jp/>）の「東北大学史料館蔵 個人・関連団体文書目録」よりPDFファイルで入手することができます。

※個人に関する情報の保護等のため、閲覧を一部制限する文書があります。

### 木下彰文書 101点

木下彰（1903～1982）は農業経済学を専門とする経済学者。代表的業績「名子遺制の構造と崩壊－農村における封建的労働の構造分析－」で1981（昭和56）年度学士院賞を受賞。本学法文学部の卒業生で、1933年（昭和8）年に講師となり、以後助教授、教授として経済政策論・農業経済学等を担当した。助教授時代に召集され中国戦線に派遣されたことも知られている。戦後は経済学部のほか農学研究所の教授を兼ね、学生部長や経済学部長を歴任したのち1967（昭和42）年3月に定年退官した。



今回公開する資料は1983年にご遺族から大学に寄贈されたもので、(1) 法文学部の



学生時代の受講ノート、(2) 戦

前・戦後にかけての東北大学での講義ノート、(3) 東北地域の農業経済、農業慣行など研究活動に関する資料・ノート等が中心である。戦前から戦後にかけての木下の教育研究活動の記録として上で貴重な資料であるほか、(1) には佐藤丑次郎、鈴木義男、堀経夫、和田佐一郎、新明正道、古田良一といった当時の教授陣や本庄栄治郎、瀧川幸辰などの授業のノートが並び、昭和初期法文学部における教育内容を知る資料ともなっている。なお、木下の旧蔵書が附属図書館に「木下文庫」として収められている。

### 柴田治三郎文書 695点

柴田治三郎（1909～1998）は青森県出身のドイツ文学研究者。昭和11年（1936）に東北帝国大学法文学部を卒業後、同大学の副手・助手、北海道帝国大学予科教授などを経て、昭和21年9月に東北帝国大学法文学部助教授として仙台に戻り、戦後の昭和26年に東北大学教授となって、ドイツ文学研究室を主宰した。昭和47年（1972）に定年退官。



今回公開する資料は、柴田の没後、平成10年（1998）12月に中村志朗名誉教授の斡旋で史料館に寄贈され、小宮豊隆の写真1点を除き、すべて封書と葉書から成る。

内容的には大きく二つに分かれ、(1) 柴田の前任者である小宮豊隆（1884～1966）とその妻恒子（1893～1992）からの手紙、(2) 柴田が兄事していた河野與一（1896～1984）と妻の河野多麻（1895～1985）からの手紙から成る。もっとも早いのは昭和11年の葉書（差出人：河野與一）で、下って同62年の葉書（差出人：小宮恒子）まで、小宮や河野が勤務していた東北大学、その後河野が移った岩波書店などでの、多くの著名人たち（阿部次郎、オイゲン＝ヘリゲル、木下杢太郎、北杜夫など）の交友の記録として、貴重かつ興味深い史料である。

## 史料館のうごき

### ○創立100周年記念展「東北大生の一世紀」を開催!!

2007年7月28日(土)から12月9日(日)まで、本学創立100周年を記念した特別展「東北大生の一世紀」を、史料館2階展示室で開催しました。期間中の来館者は3,904名にのぼり、教職員・学生はもちろんのこと、OB・OGや中高生、その他多くの市民の方々にご来場いただきました。展示のテーマは「東北大生」の歴史。恩賜の銀時計をもらった時代から「イカトン」と呼ばれた時代まで、時々の学生像を様々な角度から切り取ってご紹介しました。

会場でのアンケートの結果を見ると、モダンボーイ・マルクスボーイ等当時の学生を典型的に紹介した「現代学生罵倒論」など昭和初期の学生に関する展示、学徒出陣関連資料など戦中期の学生生活、ボート部ローマ五輪出場関係など学生スポーツに関する展示、1960～70年代の学生運動に関する展示など来館者の関心は様々。それぞれの時代に生きた学生のエネルギーを、それぞれの視点で感じ取っていただけたのではないかと思います。

### ○卒業式記念講演の記録テープをデジタル化中!

当館が所蔵する、昭和20～30年代の本学入学式・卒業式の様子を記録した録音テープ(オープンリールテープ)の電子化を行っています。当時の入学式・卒業式では学内外の著名な学者による記念講演が行われており、八木秀次、畑井新喜司、小宮豊隆、中川善之助、木村亀二といったかつての本学の名教授たちの講演テープが残されています。高橋里美、黒川利雄といった総長たちの告辞もまた、時々の大学のあり方を伝える貴重な記録です。平成19年度総長裁量経費による事業の一環として、これら東北大学の歴史を支えたかつての名教授たちの音声記録等をデジタル化し、展示室や閲覧室で皆さんに聞いていただけるよう準備を進めています。

### ○「夏目漱石展」に史料館の資料が出陳されます!(3/15～5/18)

3月15日(土)から仙台文学館にて開催される本学創立100周年記念展「学都に息づく夏目漱石の精神」展に、漱石文庫に関する小宮豊隆の書簡(写真右)、阿部次郎・小宮豊隆らによる共同研究の記録「記紀歌謡研究」など、漱石山脈に連なる東北帝大の教授たちの活動に関する資料7点が出陳されます。今回初公開となる資料も含まれていますので、ご期待下さい。

### ○「星寮のおひな様」展開催(2/18～3/14)

一昨年より行っております、恒例の「星寮のおひな様」展を今年も開催します(2/18～3/14)。昭和初期以来、看護婦寮「星寮」や大学病院で多くの人々の目と心を慰めてきたおひな様。ぜひこの機会にご覧下さい。

### ○平成19年度の法人文書移管作業を行いました

平成18年度末に保存期間を満了した本部その他の部局の法人文書に対する評価選別作業の結果、99点の文書を新たに史料館へ引継ぎました。これらについては、すでに移管されている他の文書とともに内容等に関する点検調査を行い、その後閲覧に供する予定です。



記念展のパンフレット



## 常設展示

## 『歴史のなかの東北大学』を開催しています

平成20年1月4日より、常設展示「歴史のなかの東北大学」を再開しました。本学百年の歴史の動きを解説パネルや写真・資料を使って解説するとともに、キャンパスの今昔の風景、戦前・戦後の学生生活、東北大学で活躍した学者たちの営み、女子学生や留学生たちの様子など、さまざまなテーマをたてて本学の歴史を紹介しています。

また第二常設展示として、「もう一つの源流－東北大学の包摂校－」のコーナーを設け、戦後東北大学に包摂された第二高等学校（二高）、仙台医学専門学校（医専）、仙台工業専門学校（工専）、宮城県女子専門学校（女専）の4つの学校についても、写真パネルや資料で紹介します。

新たな試みとして、入り口近くに新収資料のコーナーも設けました。史料館に受け入れられた資料のうち、最近整理が完了して公開された文書について、展示ケース2つを使い、数点を展示します。収蔵資料の最新情報として、ご覧下さい。

開館時間 10:00～17:00（16:30までにご入館ください）

休館日 土曜日、日曜日、祝日



東北大学史料館だより 第8号 2008年3月1日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 tel 022 (217) 5040

E-mail kinen1@mail.tains.tohoku.ac.jp URL <http://www.archives.tohoku.ac.jp/>